特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

２０２１年02月01日発行
戦史館事務局〒029-4427
岩手県奥州市衣川陣場下
４１番地㍑オフィス花岡
編集発行人　花岡千賀子

会長理事　岩渕　宣輝　　専務理事　小原　守夫　　☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

戦史館だよりの原稿を書き始めるときにはいつも、１年分の記事を読み返すのですが、昨年２月１日発行 118号の書出しが「終戦75周年の節目の年がスタート…岩手は積雪ゼロで異常な温暖化…とあって、アゼンとしてしまいました。わずか１年で世の中がガラッと変わってしまったのですね。

コロナに翻弄された年の末には、戦史館がある岩手県南の奥州市では、初雪のはずが、ドカンと10日も降り続き、いきなり「豪雪地帯」になったことで、建物や交通機関に被害が続出しました。岩渕も遺骨収集推進協会へ日帰り出張の日に、行きは雪で立ち往生する車の大渋滞で新幹線に乗り遅れ、帰りは新幹線に乗車している時間の２倍、４時間かけて駅から自宅まで何とかたどり着き、大雪で事故が頻発している中を無事に戻れたことにほっとしました。この冬は東京まで新幹線で月２回の推進協会通いはさぞ大変か？と心配した矢先に緊急事態の再宣言でした。終戦75周年の節目ということで、渡航が可能になったらすぐ現地へ行けるようにと推進協会事務所で、現地調査の行程を練っていたのですが、当面はストップ。推進協会の海外事業も全て中止になりました。

いつ現地へ行けるようになるか？という問題とは別に、コロナ禍とも関係なく、進めなければならないことがあります。それは旧日本兵遺骸の仮安置料金を早急に、現地のキーパーソン３名に送金すること。プアイ村、ベラップ村での遺骸仮安置費用は、まとめ役のジョコ・スナリョ氏に、ビアク島の仮安置は西洞窟のルマロペン氏夫人のマテルダさんにそしてアイブラボンディ・ムサキ両島については、元ビアク副市長カフィアール氏に。
クリスマスまでに間に合うように、推進協会に送金手続きを要請していたのですが、またしても手続き不備で現地への約束が反故にされてしまいました。

送金は、戦史館がインドネシア方面の未送還遺骨情報収集事業を担当していた頃と同じインドネシアの銀行を経由する同じ方法なので、比較的安い手数料で、２営業日で確実に先方へ届くはず。海外送金には厳格な手続きは当然で、その口座が決して犯罪に使われないように、送金者、受取者いずれも審査があり、様々な書類の提出が求められています。

登録事項に変更があれば、すぐ対処が必要なのですが、推進協会は事務所の移転届けを銀行に提出していませんでした。「住所変更届を忘れたくらい大したことではない。銀行は厳しすぎる。」などと言えるのでしょうか？　１つ１つの、面倒かもしれないけれど、正確な手続きが求められる事務作業の向こうに、ワクワクしてクリスマスを待つ現地の人人がいて、その先に日本へ帰還する日を待つ兵隊さんたちがいるのですから。

「イワブチはポンボホン（嘘つき）」とまた言われるのは仕方ありませんが、送金が遅れたせいでキーパーソンのジョコさんらもポンボホン呼ばわりされるのは申し訳ない。安置料は１月21日にようやく現地へ届けることができました。それにしてもコロナ禍で改めて思うのは、コロナ犠牲者も東日本大震災の犠牲者も戦没者も、人の命はこうも軽く扱われるのだなあと。今年は人の命の重みについてもう一度一緒に考えていきましょう。

戦史館展示資料紹介 No.4 『故松尾正義海軍技術大尉の遺品』

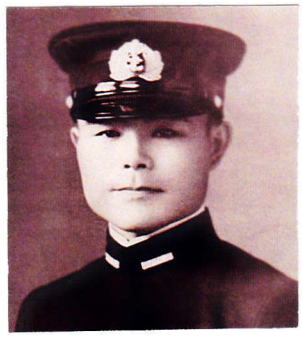
今回は武藤桂子さんからお預かりしていたお兄様の遺品です。長年、戦史館の海軍コーナーに展示されていましたが、桂子さんのご子息、さらにお孫さんの世代に語り継がれるようにと里帰りすることになりました。これまでの出来事と経緯だけでなく、武藤桂子さんが日々お兄様を追悼して詠んだ挽歌も紹介します。この紙面の都合で、短歌は縦書きでなく【　】の中に横書きとなりますが、どうかご了承願います。

武藤桂子さんから初めて連絡をいただいたのは2002年６月。郵便振替用紙の通信欄は、ぎっしりと細かい文字で埋めつくされていました。「昭和19年７月10日、ビアク島にて戦病死しました海軍２０２設営隊の故松尾正義の妹です。先日、書店にて『玉砕ビアク島』で初めてビアク島の詳細を知り、泪がとまりませんでした。もう少し早く知ることができていれば…」（一部抜粋　『玉砕ビアク島』の著者は田村洋三さん戦史館会員）

【玉砕のビアクの文字の飛びこみて　ためらわず購う街の書店に】

【兄征きし　赤道直下のビアク島　玉砕戦記いっきに読みぬ　】

故松尾正義さんは海軍技術大尉。昭和19年７月10日ビアク島でその命を絶たれました。海軍設営隊として上陸した３ヵ月後、２４歳でした。



【飛行場設営任務に兄征きし　ビアクは遙か南瞑の島　】

【戦場に逝きて七十年忘れ得ぬ兄の生(あ) れ日よ節分のけふ】

【戊年に思ひは深し兄の干支ふためぐりの夏ビアクに逝きし】

【弾は尽きマラリア飢餓との戦に　兄は逝きたり二十四歳】

【平和なる祖国を念じつつ逝きし兄の戦記を子よ伝ふべし】

2003年８月15日、武藤さんはお兄様の遺品を携えて、福岡県久留米市から飛行機で戦史館に来館。戦史館で次の５点をお預かりすることになりました。

1．勲六等単光旭日章と勲記
2．正七位の勲記
3．敵潜水艦攻撃で海没した腕時計
4．旧海軍将校用上着
5．顔写真

【吾が傍に兄いますごと思ゐし形見の軍服けふは持ちゆく】

【玉砕の人らの遺品の数々を納めしみちのく戦史館訪ふ】

【気掛かりな兄の遺品を末永く保管さるると聞きて安らぐ】

【戦死せし人らの遺骨収集の労苦のさまざま胸あつく聴く】

【一片の骨にてもよし祖国へと連れ帰りたしビアク訪ひたし】

ビアクへの現地慰霊を強く希望する武藤さんに、岩渕も福岡発着で行程が短いビアク巡礼を度々計画しましたが、健康面も、ご高齢であることもあり、武藤さんを現地まで案内することは叶いませんでした。現地慰霊が無理ならば、他にできることはないかと武藤さん

（次ページへ）

は模索し続け、2006年１月22日から２月２日までの政府派遣遺骨帰還の出迎えに参加し、大勢の戦史館会員と共に、成田空港で１４１柱の帰還を出迎えました。

この時に帰還できた柱数はビアク島２５柱、フンボルト湾岸壁のカユバトから１１６柱でした。当時のインドネシア方面の遺骨収集は、国の年間計画で組まれた正式な派遣ではない「応急派遣」と位置づけられていました。まず戦史館が企画する現地調査に、会員が自費で参加して遺骸を捜索し、その記録を厚労省に報告することで、初めて政府による遺骨収集団の派遣が決まるというものです。年間計画で予算化されていないので千鳥ケ淵戦没者墓苑での出迎え式典もなく、成田空港でさっと簡単に行われてしまいます。それではあんまりだ…と戦史館会員が成田空港まで駆けつけて帰還した遺骨を出迎えていました。

2006年当時、武藤桂子さんと妹の中島昭子さんも空港で遺骨伝達式、派遣団の解団式に参加し、遺骨収集に参加したメンバーが語る現地の様子を聞き入っていました。

【ようやくに兄の遺骨も還らんか　妹と迎えぬ成田空港】

【白布に覆われし遺骨を胸に抱く人等の見えて泪止まらず】

【野ざらしに六十年経し玉砕の戦士等の遺骨「お帰りなさい」】

武藤さんのお兄様の遺品をお預かりしてから17年余の昨年12月、武藤さんからのお手紙が届きました。手紙には「思い出の品」である勲章とその勲記を息子さん、お孫さんに譲ることで、戦争で亡くなったお兄様のことを思いおこしてほしいと願うようになった武藤さんの気持ちの変化が綴られていました。

お手紙を熟読して考えました。遺品を通じて戦争で命を絶たれた人を思い起こし、次の世代に伝えることこそ供養。戦史館が掲げる「忘るまじ語り継ごう次の世代へ」そのものの実践ではないかと。それならば、「日本国政府から戴いた勲章と勲記」だけでなく、いつも身につけていた腕時計も手元において、語り継いでいただきたい。

正義さん遺品の時計は、昭和18年12月、横須賀から飛行場の設営資材を積んで出航した輸送船が、瀬戸内海を通過して豊後水道で魚雷攻撃を受けて沈没したとき身につけていたもの。正義さんは３時間漂流した後に救助され後日、横須賀から再出航したそうです。そのときの記憶としてお父様に託した腕時計、ぜひ語り継いでいただきたい形見でしょう。

襟裏に「尾松」と右から名前が刺繍された白い軍服と顔写真は、ほかのビアクゆかりの戦没者の遺品と共に、戦史館に留まっていただくことになりました。戦史館の会員は、ビアク戦没者の方が一番多いのですが、遺品と呼べるものが何もない方が多く、今後も海軍コーナーでビアクゆかりの方々に観ていただきたいと考えています。

岩渕宣輝は今年８０歳になります。これから何年活動を継続できるかはわかりません。戦史館を公的機関に寄贈して、戦没者の孫たちの世代が今後の活動を継承できるように、あちこちこち打診しているのですが、一向に寄贈先が決まりません。前号の会報でコロナ禍で戦史館の修繕工事をする写真を掲載したところ、たくさんの会員の方々に心配され、できる限りの継続を…とご寄付、カンパをいただきました。また岩渕サンが日曜大工をしているなんてキケン！と誤解された会員も。でも大丈夫。岩渕では到底できない仕事で、足場を組んで作業しているのはプロの大工さんです。ご安心ください。